

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 宮崎展昌

近年、アフガニスタンにおける古代サンスクリット写本の発見と欧米の研究者による漢訳研究の急速な進展を背景として世界的に注目されはじめた大乘経典に『阿闍世王経』がある。本論文はこの経典のサンスクリット語断簡、チベット語訳、3種の漢訳を対象として徹底した文献学的解明をなし、本経典の編纂過程を詳細に明かしてインド仏教史上における明確な位置づけを初めて与えた画期的研究である。

論文は『阿闍世王経』の形成過程に関する諸問題を論じた本論第Ⅰ部、著者が形成の核と結論する部分のテキスト校訂と訳注の原典研究第Ⅱ部、チベット語訳・漢訳の対照シノプシスと「文殊」の漢訳語を検討する補遺の三部によって構成される。本論第1章において大乘経典をめぐる文献学の国際的現況を分析して本経典を考察するうえでの研究史上の位置づけを確保し、第2章で経題の決定、テキスト伝承系統の弁別、チベット語訳と漢訳の文体的特色の析出と訳者の確認をなし、これらの基礎作業に基づいて、第3章で『阿闍世王経』の記述内部に見られる齟齬や矛盾の分析と他典籍との照合を通してその編纂過程を詳細に解明、第4章で五逆や非如理作意といった本経の重要な思想的概念の仏教史上における位置づけを明らかにした。著者は以上の論証過程において、9世紀チベット制作の『デンカルマ目録』の記述と現存資料との齟齬の解明、漢訳から重訳されたチベット訳文体の特質の提示、支讖訳の特徴と彼による訳出経典の決定など、きわめて重要な多くの新知見を獲得した。

第Ⅱ部の原典研究では、サンスクリット断片に加え、11系統のチベット訳、16種の漢訳を綿密に校合し、信頼に足る校訂テキストを完成するとともに、博覧強記の注を伴った邦訳を施す。漢訳テキストの提示法においては爾後の一つの模範ともなる成果を示している。補遺で扱われた、チベット訳・漢訳の対照表も研究の基礎資料として至便なるものであり、文殊の訳語の検討も種々、学界に新知見をもたらしている。

本論の文章には生硬な表現や回りくどさを感じさせる箇所が少なからずあり、邦訳もさらなる洗練が望まれはするものの、いずれも許容範囲にある。『阿闍世王経』という重要な大乘経典の形成過程を精緻に明かすことに成功した本論文は、学界に寄与するところまことに大きく、審査委員会は博士学位(甲)を授与するに値するものと判断する。